

スカシユリの二度切り栽培と球根の利用法

(園試高冷地開発センター、野菜花き部)

1. 背景とねらい

本県のスカシユリの切り花生産は秋出しの抑制作型を中心に産地が形成されているが、地域によっては種苗費の軽減やハウスの効率的回転を目的として据置の季咲き作型と組合せた二度切りを実施している例がある。しかし、抑制作型の品種、栽培条件などにより季咲き作型の生産が不安定になることも見受けられる。そこで、抑制作型から季咲き作型までの一貫した技術が求められているため、作型別球根サイズと品質の関係、切り下球根の肥大方法や利用法を検討したところ、成果が得られたので参考に供する。

2. 技術の内容

1) スカシユリの二度切り(抑制+季咲き)栽培において抑制作型と抑制作型収穫後の季咲き作型が引き続いて成り立つ球根サイズの最小基準は、品種別に以下のとおりである。

品種	抑制作型の球根サイズ(球周)	→	季咲き作型の球根サイズ(球周)
モンテローザ、エロージャアント	10~12cm		8~10cm
メトソ	12~14cm		8~10cm
サンセル	10~12cm		10~12cm
モトル、グランパラディソ ボリアナ、ローマ	12~14cm		10~12cm

2) その場合、抑制作型において切り下茎長を5~8cm程度残して収穫すると、切り下球の肥大が良好となり、上記の季咲き作型の球根サイズを確保できる。

3) 二度切り後の切り下球根の再利用法

季咲き後の切り下球を露地圃場に植えかえて、4か月程度養成することにより、再度季咲き栽培に利用できる球根が得られる。その場合、切り下茎長が20cm程度残っていると球根肥大が向上する。また、養成期間を1年間(翌年の秋まで)とすると、季咲き栽培のほか、抑制作型にも利用可能なサイズの球根が得られる。

4) 抑制作型での生育が悪く、切り下茎長が確保されなかったり、残った葉数が少ない場合には球根の肥大が悪いため、据置による季咲き栽培での切花品質や採花率が低下する。その場合は植えかえるか、そのまま据え置いて翌年球根養成することで大球が得られる。

3. 指導上の留意事項

1) 品種により異なるが、大球になりすぎても花蕾数過剰となり品質が低下するので、定植時に選別し、利用しないようにする。(グランパラディソの抑制作型では球周20cm以上の球根)

2) 県北高冷地帯における季咲き栽培では、莖長が3~8 cmの間の花房分化から離れずい形成期にかけての低温障害に注意する。冬期間はハウスを開放して管理し、春に莖が伸びはじめたらべたがけ資材等を活用して低温を回避する。

3) 球根を長く利用するため、病害虫防除の徹底を図り、随時ウイルス病株の抜取りを行う。

4. 試験成績概要

表1 二度切り作型の球根サイズと品質評価 (平成3年~5年)

品種	抑制作型				季咲き作型				
	定植時球周 (cm)	花蕾数 (花)	2花以上割合 (%)	評価 ¹⁾	球周 (cm)	球重 (g)	花蕾数 (花)	2花以上割合 (%)	評価 ¹⁾
ロージヤイ	12~14	4.4	100	◎	9.4	15	4.0	100	◎
アト	10~12	5.5	100	◎	9.7	18	5.9	100	◎
モトル	16~18	5.6	100	◎	15.4	48	8.7	100	◎
	14~16	5.4	100	◎	13.5	31	8.7	100	◎
	12~14	7.7	100	◎	9.1	14	1.7	65	○~△
ホリアナ	12~14	5.6	100	◎	10.0	21	4.0	100	◎
ロ-7	12~14	8.3	100	◎	11.8	29	2.6	100	○~◎

* 切り下莖長: 5~7 cm

評価¹⁾: 品質評価 ◎;品質良、○;出荷可能(2花程度)、△;品質やや不良、×;品質不良

表2 抑制作型後の球根肥大方法と切り下球の大きさ (平成5年)

品種	抑制後 球肥大 方法	抑制作型 定植時球周 (cm)	処理方法		切り下球の大きさ ³⁾	
			長さ (cm)	葉数 (葉)	球周 (cm)	球重 (g)
モトル	切り下莖長	12~14	8	9.3	10.7	21
	未収穫放任 ²⁾	12~14	67	137.0	11.1	25
ホリアナ	切り下莖長	12~14	7	8.1	11.8	30
	未収穫放任	12~14	79	96.2	12.7	32
ロ-7	切り下莖長	14~16	16	15.9	11.9	23
	未収穫放任	14~16	105	189.2	13.3	35

未収穫放任²⁾: 未収穫で摘蕾もしない処理方法、切り下球の大きさ³⁾: 調査日;12月13日